

平成26年度国立天文台研究集会開催報告書

平成25年4月28日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) ちあき げん					
		千秋 元 印 					
	所属・職	東京大学 大学院理学系研究科 物理学専攻 博士課程3年					
	電話	03-5841-4191	E-mail	gen.chiaki@utap.phys.s.u-tokyo.ac.jp			
研究集会名	第44回天文・天体物理若手夏の学校						
開催期間	2014年 7月 28日 ～ 2014年 7月 31日						
開催場所	〒389-0821 長野県千曲市上山田温泉2-9-6 ホテル圓山荘 TEL : 026-275-1119						
参加人数	345人						
研究集会の概要	天文・天体物理若手夏の学校（以下、夏の学校）は、日本国内の天文学・宇宙物理学を専門とする大学院生が参加する滞在型研究会である。滞在型という特長を活かして、大学院生の研究発表の場として、また、他大学の学生との交流の場として機能しており、総合的な研究の質の向上を目的としている。運営は大学院生自身の手によって行われ、全国5つの地区の大学・研究機関の5年持ち回り制である。第44回夏の学校は東京大学に事務局が設置され、中央大学、東京工業大学、東京理科大学、日本大学、早稲田大学の学生が運営を行い、7月28日から31日までの4日間、長野県のホテル圓山荘で開催された。 夏の学校では、分野ごとに【重力・宇宙論】、【宇宙素粒子】、【コンパクトオブジェクト】、【銀河・銀河団】、【太陽・恒星】、【星間現象】、【星形成・惑星系】、【観測機器】の8つの分科会が設けられ、それぞれの分科会では、希望する大学院生が口頭発表またはポスター発表を行っている。また、例年ポスターアワードとして優秀なポスター発表を参加者の投票により選出し、該当者に口頭発表を依頼している。さらに、各分科会では世界的に実績を持つ研究者を招待し、最新の研究結果についての講演を依頼している。ここでも滞在型研究会の利点を活かして、招待講師との密な議論によって参加者の研究に対する意欲や質の向上が期待される。 特に今回は、参加者の研究の質のさらなる向上に資するため、前回までとは異なる新たな企画を打ち出した。まず、夏の学校参加申込時の講演概要を基に、座長団が口頭発表の選別を行う発表振り分けを実施した。今回は試験的な実施であったため、振り分けの基準設定は各分科会の座長団に一任されたが、特に口頭発表に対しては一定の質が要求された。また今回は、研究自体の質の向上とともに、それを発表する技術を磨くことも重要であるという理念から、ポスターアワードだけではなく、優れた口頭発表に対しても表彰を行うオーラルアワードを実施した。加えて、全体企画として学会発表スライド、ポスター、論文などの作成の際に重要となるビジュアルプレゼンテーションの講演を筑波大学芸術系の田中佐代子氏に依頼した。前半は講義形式で、研究内容を伝える上で効果的な配色、文字の配置、それから図の作成方法などについての解説があり、後半は参加者のうち4名の希望者に対してスライドやポスターの公開添削があった。						

研究集会の成果	参加人数は大学院生328名、招待講師17名の計345名で、発表振り分けの結果、口頭発表は180件（ポスター同時発表を含む）、ポスターのみの発表は128件であった。参加者数は昨年度（計347名）とほぼ同じであったが、発表者数は昨年度より約25%増え、研究会としての関心度が大きくなっていることが伺えた。会期中、どの分科会会場も多くが学生が参加し、手を挙げて質問をする姿が見られた。招待講演においても熱心な学生は手を挙げ、講演者に質問をしていた。講演終了後も何人かの招待講師は会場に滞在または宿泊しており、学生との間で研究について、あるいは将来のことについて議論をしている様子が見受けられた。また、ポスターアワード発表後は、受賞者のポスターを取り囲んで他の参加者が受賞者に質問・議論をしていた。特に、受賞者とは分野の異なる学生が、受賞者に研究内容だけではなく、発表のノウハウを尋ねていたことが印象的であった。以上の通り、期待通りの成果が得られたことがうかがわれる。 これを定量的に示すために、我々は研究会終了時に参加者にアンケートを行った。まず、「夏の学校の意義」について、「参加者同士の交流」と回答した参加者が最も多く、回答者の63%を占めていた。夏の学校が、参加者にとって学生、研究者間の交流を促進するために重要な役割を担っていることがわかった。このように、同じ分野間あるいは異なる分野間の学生の交流により、各自の研究の推進の一助となることが期待される。また、今回ポスターアワードに加えてオーラルアワード受賞者講演を行ったが、「どちらもやるべき」という意見が88%に上った。理由として、「自身の口頭発表のモチベーションに繋がる」「他分野の興味深い研究を聞く良い機会であるから」というものが見られた。同様に、ビジュアルプレゼンテーション講習についても満足度が高く（62%）、「研究分野のみならず、その他の間接的に研究に関係する知識を得ることも有意義」という意見が挙げられた。 一方、改善すべき点として、「分科会の人数比が大きく偏っており、分野の分け方を調整すべき」「ポスター会場の面積が狭い」といった意見が挙げられていた。このような改善点をふまえ、次回以降よりよい研究会づくりに努める必要があるが、概ね、大学院生の研究の質の向上という目的は達成されていると考えられる。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	夏の学校では例年、財源の不足している研究室・研究機関に所属する参加者に対し、旅費補助を行っています。下記の経費使用実績の通り、貴研究機関からの補助金は参加者20名の旅費に充てられました。 アンケートの結果、旅費補助に対して、必要であると回答した参加者は73%に上りました。これはアンケート回答者242名のうち、177名に相当します。また、旅費補助を受けられない場合に夏の学校への参加が困難になる回答した参加者は27%と、一定人数存在しています。夏の学校は上記のように、参加者同士の交流を促し、各人の研究の質向上をもたらすと期待されるため、学生の夏の学校への参加機会を確保することは大変有意義であり、そのためにも旅費補助の必要性は無視できないものとなっています。夏の学校事務局側も、各参加者の旅費の削減のために、東日本・西日本いずれの学生にとってもアクセスの良い長野県の圓山荘を会場として選定しました。また、次回夏の学校も、今回の実績をもとに圓山荘を会場とすることになりました。今後も定期的に会場として使用することが検討されています。 以上のように、夏の学校を今後も安定して開催をするために、旅費補助は必要不可欠です。そして、旅費補助は貴研究機関の補助金に依るところが大きく、今後も継続的なご支援を賜りますようお願い申し上げます。我々夏の学校の事務局のみならず、旅費補助を受けました参加者に代わりまして、この場で貴研究機関の援助に深く感謝いたします。